

## 日本プロテスタント史を読み解く (3)

塩野和夫

### 第4章 日本組合基督教会史

#### はじめに

日本のプロテスタント・キリスト教は具体的には大小の教派によって成立し、活動している。第4章が扱う日本組合基督教会も特色のある教派の一つで、これを3つのグループに分けて考察する。

#### 第1グループ

日本組合基督教会

#### 第2グループ

澤山保羅 (1852~1887)

松山高吉 (1847~1935)

#### 第3グループ

小崎弘道 (1856~1938)

原田 助 (1863~1940)

第1グループは「日本組合基督教会」1項目で構成し、組合教会史の全体像を描き出している。時期ごとに変化していった活動内容を取りあげたところに特色がある。

第2グループの2項目「澤山保羅」と「松山高吉」で扱う2人は、組合教会の草創期においてそれぞれに際立った活動をしていた。組合教会に対して対照

的なあり方を示した彼らの存在は、草創期における組合教会の特色を示している。

第3グループの2項目「小崎弘道」と「原田助」の2人は、組合教会史全体を通じて活躍した。組合教会で重要な立場を担った彼らの活動も組合教会史の特色となっている。

## 第1節 日本組合基督教会史を概観する

### (1) 日本組合基督教会

日本組合基督教会は日本基督伝道会社が1886（明治19）年に開催した第9回年会において組織された。組合教会とは Congregational Church の略語である。教会自治を主義とし、協同の精神を重んじた。

1869年に最初の宣教師を日本に派遣し、70年に神戸で活動を開始したアメリカンボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）を源流とする。78年に設立された日本基督伝道会社によって組織的な伝道活動を始めた。

組合教会前史（1869-85）と組合教会史第1期（1886-1903）に伝道活動を主要な課題とするキリスト教が認められる。この時期の教会は広範な地域で展開する活動の拠点であり、青年が主要な担い手であった。熱心な伝道活動の結果、1903（明治36）年には105の教会（独立教会40・仮教会39・講義所26）を有した。しかし、教会の多くは教会建物を持たず活動費も不十分であった。

そこで第20回総会（1904年）における教会規約の抜本改正と信徒大会の宣言書により、第2期（1904-18）へと移行する。第2期を担ったのは経験豊富な牧師と会員で、彼らの指導によって多くの教会が自給独立し、会堂を建設、活動費も獲得した。他方、組合教会本部は理事会を中心とした執行機関を充実させ、各部局の規則も整えて組織化を進めた。1911年には朝鮮人伝道にも着手した。1918（大正7）年の教会数は113（独立教会82・仮教会17・講義所14）である。

第35回総会（1919年）における教会規約の全面修正と新時局伝道宣言書により第3期（1919-35）に入る。新時局伝道宣言書は「男女の平等と貞節を確立

せんこと」, 「階級的差別の弊風を改め人種的偏見を打破せんこと」など, 社会的課題への関心と活動を呼びかけた。第3期における教会は地域社会に向けた教育・文化・社会福祉に関する情報発信と活動の場であった。したがって, 担い手は幅広い学識と行動力が求められた。順調だった朝鮮人伝道は会員数の大幅な減少により第3期に失敗した。しかし, 失敗を引きずるのではなくアメリカンボードとの協力関係の強化へと進んだ。1935 (昭和10) 年の教会数は194 (教会192・仮教会2) である。

第52回総会 (1936年) における教会規約の全面修正と53回総会 (37年) における「支那 (ママ) 事変における声明」及び「時局に関する申合」により, 第4期 (36-41) に入る。教会が国家の戦時体制に組み込まれていった時期に組合教会も管理統制を強化した。個別教会にとっては教会の維持が課題となり, 活動は停滞する。1939年の教会数は197 (教会160・伝道所37) である。アメリカンボードとの友好関係を断ったのもこの時期であった。第4期の特色が日本基督教団第3部所属期 (41-43) にも認められる。

〔文献〕塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』新教出版社, 1995年

## (2) 第1グループの解題

「日本組合基督教会」は組合教会史を時期区分することによって概観している。これを「日本プロテスタント」の時期区分及びそれぞれの時期の内容と比較すると, 組合教会の特色が浮き彫りになる。それぞれの時期区分は次の通りである。

### 日本プロテスタント史

- (1) 萌芽期 19世紀半ば～1872
- (2) 確立期 1873～1909

---

1) 参照, 塩野和夫「日本プロテスタント史を読み解く (1)」『国際文化論集』第36巻第1号, 1～11頁。

- (3) 展開期 1910～1930
- (4) 沈潜から再生へ 1931～1952

#### 日本組合基督教会史

- (1) 前史 1869～1885
- (2) 第1期 1886～1903
- (3) 第2期 1904～1918
- (4) 第3期 1919～1935
- (5) 第4期 1936～1941

日本プロテスタント史及び日本組合基督教会史の各時期の活動内容を概観する。

日本プロテスタント史の萌芽期と確立期は時期で見ると日本組合基督教会史の前史と第1期にほぼ対応している。この時期のプロテスタントは活動主体が海外の宣教師から日本人キリスト者に移行し、各地にキリスト教会・キリスト教学校・キリスト教の社会团体を設立している。そのような状況にあって組合教会は広範な伝道活動に従事し、青年が担い手であった。全国に105の教会を設立したが、多くの教会に会堂はなく活動費も不十分であった。

日本プロテスタント史の確立期は組合教会史の第2期と第3期に対応している。プロテスタント史の確立期には基督教学校教育同盟（1910年）や日本基督教会同盟（1911年）を設立し、キリスト教学校や教会に共通する課題に取り組んでいる。社会的発言も積極的に発信している。組合教会史の第2期には教会の自給独立に力を注ぎ、担い手は経験豊富な牧師と会員であった。第3期の教会は地域社会に向けた教育・文化・社会福祉に関する情報発信と活動の場であった。

日本プロテスタント史の沈潜から再生への時期の前半は組合教会史の第4期と対応する。プロテスタント史のこの時期の前半は戦時体制への協力により社会に向けた発言を控え、1941年に日本基督教団を創立した。組合教会史の第4

期は戦時体制下にあり、教会の維持が課題となっていた。

このように概観すると、日本プロテスタント史は日本の近代史に対応した活動を展開していたことが分かる。プロテスタント史の全般的な状況にあって、組合教会史においては個別教会が地域社会にあって時代状況に対応した活動を行っている。そこに教会自治を重んじた組合教会の特色がある。

## 第2節 草創期における組合教会

### (1) 澤山保羅

山口市吉敷に下級武士の長男として生まれ、経済的に困窮する環境で育つ。幼名を馬之進と言った。1858年に吉敷の憲章館に入学し、四書五経・書道・武道・礼式を学ぶ。66年の四境戦争（第2次長州征伐）に際しては、芸州口（広島県）で幕府方と戦った。68（明治元）年、三原・今治において陽明学を学ぶ。

1870年には神戸へ出て、グリーン（Greene, D. C., 1843-1913）から英語の手ほどきを受け、キリスト教に触れた。72年アメリカ合衆国イリノイ州エバンストンに私費留学し、ノースウエスタン大学予科で学ぶ。貧困と闘病生活に苦しみながら、同年12月に洗礼を受けた。73年にはパブリックスクールへ移る。レビット（Leavitt, Horace Hall, 1846-1920）から日本伝道への献身を勧められ、志を固めた75年に馬之進から保羅へと改名している。

1876（明治9）年8月に帰国し、9月から大阪の心斎橋筋高麗橋通角に開設されていた松村診察所で通訳として働いた。77年1月に松村診察所を仮会堂とする浪花公会（現在の日本基督教団浪花教会）の設立式で、日本における最初の接手礼を受けて牧師に就任する。浪花公会は自給独立を主義とした。

1878年1月には日本基督伝道会社を設立し、新島襄・今村謙吉と共に委員に選出される。同月、大阪土佐堀で梅花女学校の開校式を行った。田島たかと梅花女学校で結婚式を挙げたのは、同年4月である。帰国後に取り組んだ事業の急速な展開は澤山の明確な指針の提示と熱意による。

その後の伝道活動として、1878年より活動に着手していた岸和田で85年1月に岸和田教会（現在の日本基督教団岸和田教会）を設立している。79年1月に

は天満橋教会（現在の日本基督教団天満教会）を設立して仮牧師に就任した。80年には大和郡山地方における活動に着手し、84年1月に大和郡山教会の設立式と成瀬仁蔵の牧師就任式を挙行している。

教育活動としては1883年5月に梅花学園の校長に就任して、同年7月に執行された第1回の卒業式に臨んでいる。以後、キリスト教学校としての立場を明確にして経営問題に取り組み、危機を克服した。闘病しながら取り組んだ澤山の自給独立の主張は理念と実践において一貫していたため、キリスト教会と教育の現場で大きな影響を与えた。

大阪の聖バルナバ病院で亡くなり、岩崎墓地に埋葬された。1909（明治42）年に阿部野墓地へ改葬されている。

〔文献〕 茂義樹編『澤山保羅全集』（2001）

笠井秋生・佐野安仁・茂義樹『澤山保羅』（1977）

## （2）松山高吉

越後糸魚川に生まれる。幼少より親しんだ国学の研究を深めるため、1869（明治2）年に京都の白川学舎で国史と律令格式を学ぶ。同年東京へ移り、国学の研究を続け、和漢の史伝も学ぶ。

神道家としてキリスト教を探るため関貫三と名乗り、1872年に神戸のグリーン（Greene, Daniel Crosby）を訪ねた。グリーンから聖書や世界の宗教事情について教えを受け、目的を達したので73年6月に東京へ帰る。ところが国学を学んだかつての仲間と宗教政策を巡って意見が合わず、10月にキリスト教を学ぶために神戸へ移る。74年4月に洗礼を受け、摂津第一公会（現在の日本基督教団神戸教会）の設立に参加した。同年5月に塚本経子と結婚している。

古神道の立場に立つ松山によると、古代の日本人は造物主を崇拜祭祀していた。そのような神道的精神性を生きる者にとってイエスは「真の光」と理解された。そこで、「われ朝に夕べに祈りて止まざるは真の光の隈なく我が日本を照らし」（「日本の神道」『六合雑誌』122号、1891年、79-80頁）と祈る。神道

思想によるキリスト教の受容である。

この事実は松山のキリスト教学校における教育活動を特色づけている。同志社では同志社社員（83年2月－93年7月、理事99年2月－1911年3月）を務め、1887年には同志社病院及び京都看護婦学校の設立に協力、同志社社長代理（1906年－07年）も担当している。教職としては神戸女学院で国語・習字を教えている（88年－89年）。同志社では神学校で神道及び日本宗教史を、政法学校で日本政治史を、普通学校で国史・国文を、女学校で日本文学史物語類を、理科学校で工芸史を担当している（93年－96年）。復職してからは普通学部と高等学部で倫理及び国史を教えている（99年－1906年）。平安女学院では倫理及び国史を担当し（96年－1909年）、1903年には平安女学院校歌を作詞している。

教会活動では超教派的な立場を採り、恩義を重んじた。組合教会では神戸公会初代牧師（80年6月－84年9月）、平安教会牧師（87年12月－91年9月）、同志社教会仮牧師（90年2月－同年4月）を担当し、日本基督伝道会社社長も務めた（90年4月－9月）。聖公会の堅信札と按手式を受け組合教会から移った（97年1月）事実は、教派に対する松山の態度をよく語っている。

日本文化に対する松山の才能が発揮されたのは聖書編纂と讃美歌編纂事業への参加である。聖書編纂事業に関しては、新約聖書の翻訳に参加し（74年6月）、新約全書の翻訳を完成している（79年11月）。旧約聖書の翻訳委員も引き受け（84年1月）、旧約全書の翻訳を完成している（87年10月）。さらに、新約全書改訳委員会の仕事に参加し（1910年4月）、完成している（17年2月）。讃美歌編纂事業に関しては一致・組合両教会の『新撰讃美歌』委員を引き受け（86年春）、完成出版している（88年5月）。聖公会でも『古今聖歌集』の委員を引き受け（1901年）、完成している（02年8月）。

晩年は京都洛北の地で祈りと読書の日々を過ごす。京都若王子山の同志社墓地に葬られた。

### (3) 第2グループの解題

澤山保羅と松山高吉にはいくつかの共通点が認められる。

幼少期に儒教（澤山）や国学（松山）を学んだ後に、両者ともにグリーンと出会い、キリスト教に触れている。その後、洗礼を受けただけでなく、二人とも牧師として活躍した。キリスト教教育にも取り組み、澤山は梅花学園で松山は同志社などで教えている。

しかし、両者の違いも顕著である。教会の自給独立を主張した澤山に対して松山は超教派的な立場を取り組合教会から聖公会に移っている。澤山が教会とキリスト教教育に集中したのに対して、松山は聖書の編纂事業や讃美歌の編纂事業にも精力的に関わっている。

澤山保羅と松山高吉に認められる共通点と相違点は草創期組合教会の柔軟性と多様性を示している。

## 第3節 人物から見る組合教会の特色

### (1) 小崎弘道

小崎次郎左衛門・百寿の次男として熊本市本山町に生れる。幼少期より母から漢書の手ほどきを受け、藩校時習館で文武両道を学ぶ。1869（明治2）年に父を亡くし、母と共に一家を支えた。

1871年熊本洋学校に入学、生徒取締を4年間務める。洋学校では自主的な人間形成に尽力したジェーンズ（Janes, L. L., 1838-1909）の影響を受けたが、76年1月の奉教趣意書の誓約には加わらなかった。しかし、直後にキリスト教信仰を生きる道を選び、ジェーンズから洗礼を受けた。同年9月、同志社英学校に入学してキリスト教神学を学ぶ。在学中は彦根伝道を担当し、77年5月に中国・四国巡回伝道、78年夏には宮崎伝道に従事した。

1879年6月の同志社卒業後は、東京に移って伝道活動に従事した。同年12月に新肴町教会を設立すると同時に按手礼を受けて牧師となった。80年5月には東京基督教青年会の会長に就任し、青年会の事業として『六合雑誌』を創刊する。学農社を設立した津田仙の紹介により岩村千代と結婚したのは、81年6月

である。82年9月に新肴町教会は日本教会と合同し、東京第一基督教会と改称した。83年には警醒社を設立して、牧師を辞任している。同年8月からは『東京毎週新報』の出版業務を担当した。86年11月に東京第一基督教会（91年に霊南坂基督教会と改称）の牧師就任と同時に番町教会を設立して兼務した。

1889年6月から7月に同志社で開かれた第1回夏期学校において「聖書のインスピレーション」と題して講演し、聖書無謬説を批判し歴史的批評学を容認した。

新島襄の死去（1890年1月）により、同年4月から同志社社長に就任して京都に移る。教育方針をめぐって伝道活動を重視する宣教師と対立し、アメリカンボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）からの独立を推進した。97年4月に同志社を辞任している。

1897年秋には東京に移り、翌年2月に京橋教会を再興して牧師となる。99年5月には京橋教会と合同した霊南坂教会の牧師となる。1900（明治33）年1月に『東京毎週新誌』を発行する。17年には霊南坂教会の会堂を改築して日本有数の教会に育て、1931（昭和6）年に辞任している。

伝道活動としては、1902（明治35）年7月のハワイ伝道、04年4月の四国今治伝道に従事している。05年8月にはアメリカンミッショナリー協会の依頼を受けて、合衆国太平洋岸の在留日本人への伝道を行った。07年7月の台湾における巡回伝道、09年11月の北海道での伝道応援、13年11月の岡山集中伝道に携わった。19年には南洋伝道団を組織し、34年にミクロネシアにおける伝道活動に参加している。

教育活動としては、東京伝道学校（1903-08）と東京神学校（1922-26）を設立して、伝道者を養成した。07年7月には日本日曜学校協会を設立して、第1回大会を開いている。

日本組合基督教会会長・日本基督教連盟会長も務めている。

〔著書〕『七十年の回顧』1926年

(2) 原田 助

熊本の坪井に鎌田収の次男として生まれる。その後、山鹿群上永野村の原田家養子となり、原田姓を名乗る。熊本の本山村にあった竹山茶堂（1812-77）の私塾で漢籍を学んだ後、熊本洋学校に入学した。廃校後は熊本の広取英語学校に移る。

1880（明治13）年に同志社英学校へ編入学し、同志社学術講演会などに参加した。81年にゴードン（Gordon, M. L. 1843-1900）から西京第二公会（現在の日本基督教団同志社教会と平安教会の前身）で洗礼を受ける。予科で神学を学び、84年に卒業した。

在学中から神戸英和女学校（現在の神戸女学院）で教えていたが、84年9月に摂津第一公会（現在の日本基督教団神戸教会）の仮牧師となり、神戸英和女学校を辞任した。85年5月には按手礼を受けて、摂津第一公会の第2代牧師に就任する。在任中に川本佐喜（1872-1948）と結婚した。

1888年8月アメリカへ留学し、シカゴ神学校・イエール大学で学ぶ。91年からはイギリス・ドイツの諸大学で聴講を続け、96年11月に帰国している。

帰国後は番町教会（現在の日本基督教団番町教会）・平安基督教会（現在の日本基督教団平安教会）における活動を経て、98年6月に神戸教会に再任した。その頃、長男健（1892-1973）・次男泰・長女芳子・次女秋子と4人の子どもがいた。

キリスト教雑誌の出版にも協力し、『基督教新聞』『六合雑誌』『基督教世界』の編纂作業に関わった。

1907（明治40）年1月、同志社社長（17年以降は総長）に就任する。着実な進展を背景に12年には専門学校令による同志社大学を開校した。また、山路愛山や有島武郎など内外の著名人による講演会を実施して、同志社アカデミズムを樹立する。

日本組合基督教会会長を務め、キリスト教青年会や共励会運動にも協力した。1920（大正9）年にはハワイ大学東洋学部を創設して、部長となる。1920年代以降、排日運動が激化する中で25年に太平洋問題調査会を創設して、日米関係

の改善に努めた。

エジンバラ大学とハワイ大学から法学博士号 (L. L. D.) を、アーモスト大学からは神学博士号 (D. D.) を授与している。

京都で死去し、同志社葬が行われた。

〔文献〕原田健『原田助遺集』(1971)

### (3) 第3グループの解題

小崎弘道と原田助の活動はいずれもほぼ組合教会史のすべての時期に及んでいる。

熊本に生れ、熊本洋学校で学んだ後に同志社英学校に入学した点で二人は共通している。卒業後、組合教会で働き、同志社で教え、キリスト教の出版社に関わったことでも二人は通じている。

しかし、卒業後の活動で重点の置き方に相違が認められる。幅広い活動に従事しながらも小崎の場合は教会と伝道に重点がある。それに対して原田は同志社アカデミズムの樹立やハワイ大学東洋学部の創設、アメリカにおける日米関係改善運動への参加など、文化・教育・社会運動に尽くしている。

小崎弘道と原田助に認められる共通点と相違点は組合教会全般に認められる特色を示している。

## おわりに

日本組合教会の全体像が第1グループを考察した第1節で明らかにされている。それによると、日本プロテスタント史の枠組みにあって、組合教会は自給独立を重んじ、個別教会の活動が盛んであった。また、キリスト教学校や社会活動にも意欲的に関わっている。

いずれも二人の人物を取り上げた第2グループと第3グループでは草創期及び組合教会全般の特色を探求している。澤山保羅と松山高吉には共通性も認め

られるが、相違点が顕著であった。特に教会の自給独立を主張した澤山に対して教派に対して柔軟な姿勢を示した松山は聖書の編纂事業や讃美歌の編纂作業に取り組んだ。いずれも草創期における組合教会をよく表現している。

小崎弘道と原田助の相違点は組合教会の立場をよく示している。とりわけ教会と伝道活動に従事した小崎弘道に組合教会の一面を見ることができる。他方、文化・教育・社会活動に尽くした原田の立場も組合教会の一面を示している。

このように見ると、基本的に個人と個別教会の自由を尊重した立場が組合教会の様々な特色を生み出していたことが分かる。

## 追記

事情により「日本プロテスタント史を読み解く」は今回をもって終了することとなった。当初の予定では「日本プロテスタント史を読み解く(4)」において取りあげる教育者は以下の通りであった。

ジェーンズ (Janes, L. L., 1837-1909) 熊本洋学校で教える。

ベリー (Berry, J. C., 1847-1936) 同志社病院の院長を務める。

ラーネッド (Learned, D. W., 1848-1943) 同志社で教える。

小山東助 (1879-1919) 関西学院で教える。

デフォレスト (Deforest, C. B., 1879-1973) 神戸女学院で教える。